

思い通りにはならない進路

渡辺 安虎（公共政策大学院・経済学研究科）

自分の進路は思い通りにならないことが多く、人生のなかで何度も進路を設定し直してきました。ただ、自分のキャリアにはあまり後悔はありません。自分の進路の外で一つ大きな後悔がありますが、それは進路の話そのものではないのでここでは触れないでおこうと思います。

他人の進路選択の話を聞いても直接役に立つことは何もないと思うのですが、二点お伝えできればと思います。一点目は進路選択が想像以上に偶然や周囲の人や環境に大きな影響を受けるという点、二点目はうまく行かない場合のリスクを抑えられれば、より自由にリスクをとった進路選択が可能になるという点です。どちらも当たり前かもしれませんが、以下では私の例でこの話をしてみます。

私は文 II に入学し、そのまま経済学部に進学しました。文 II に進学したのは強い進路希望があったからという訳ではありませんでした。実家は地方の中小企業で、私は一人っ子だったので、親の後を継ぐのだろうなと思い、であれば経済学部だと考えて文 II に進学しました。

上京して新しい世界が開けると、今度は東京の先にある世界はどうなっているのかと考え、国際的なものに憧れ、当初そのような進路を進めないかと考えました。ただ、国際関係論の授業や高山ゼミという意識の高い学生が集まる授業をとったのですが、明らかな実力不足で馴染めませんでした。当時、文 II 生は誰でも経済学部に進学できたので、進振りのために頑張る気もなく、早々とそのような進路は諦めてそのまま経済に進むことにしました。

こんな消極的な感じで経済学部進学を決めました。2年生の時のミクロ経済学の授業は面白く感じました。政策という評価の難しそうに思えるものを、一定の仮定の下で明確に評価することができる体系立った考え方が経済学にはあり、それが厳密に展開されることに驚きました。授業が毎回とても楽しかったです。経済学部進学は積極的な選択ではなかったものの、だんだん悪くない選択だと思い始めました。

経済学部では今も学生の勉強はゼミが中心ですが、私は神取ゼミというゲーム理論のゼミに入りま

した。先生が着任したばかりで定員割れでした。神取先生のゼミは英語で大学院の教科書を読み進めるものでとにかく勉強になり、何より先生が研究・教育の面でもそれ以外の面でも万事スタイリッシュで（憧れて研究者を目指した人は多いと思います）、私には選べないと思いましたが、研究者という進路があることを現実的に認識しました。神取先生がゼミの先生だったことは幸運でした。

ちょうどその頃、実家の事業がうまく行かなくなり、後を継ぐどころの話ではなくなりました。両親には苦労があったと思いますが、私は自由に進路が選べるようになりました。あまり想像していない事態でした。

自分で積極的に進路を選ぶことになってみると、研究者になる自信はもろもないものの、経済学を生かして政策に関わる仕事に就けないかと考えました。バックパッカーとして途上国を旅行するのが好きだったので、そのことからくる問題意識もあり、日本政府の開発援助機関である海外経済協力基金（現在の JICA の円借款部門）に就職しました。上手く行かなかったら大学院に進学しようと思っていたので、就職活動は他には輸出入銀行（現在の国際協力銀行）だけを受けるというリスクを取れました。

基金での配属はインドネシア・マレーシア担当課で世銀との協調融資やエネルギーセクターの担当でした。就職した 1998 年はアジア通貨危機が本格化した年で、インドネシアはスハルト政権が倒れ、政治も経済も大混乱に陥りました。その際に自分が担当していた世銀との協調融資に条件として付された政策条件が、あまりにもワシントン DC の PhD 持ちが机上で考えたものと思えず、腹立たしく思いました。

自分も PhD を取得して反論できるようになりたいと思い、ちょうど就職先から留学派遣のタイミングだったので、退職して PhD 留学することにしました。研究者になりたいという気持ちはなく、PhD を取得したら世銀やアフリカ開発銀行などの開発金融機関に就職し、開発金融のプロフェッショナルになりたいと思っていました。奨学金がとれたので退職して留学しました。勤務先に仁義を切って退職することで、PhD 取得後に就職先がなくなっても再雇用してくれる道が残ると考えてでした。

しかし、進学先のペンシルベニア大では教員の移籍など様々な理由から開発経済学の授業が在学中開講されず、別の分野を専攻しました。政治行動のデー

タをゲーム理論的な計量モデルで分析する政治経済学の授業が面白く、その授業で学んだ交渉のゲーム理論モデルの推定手法を発展させて医療過誤訴訟の交渉モデル推定で PhD 論文を書きました。開発金融の専門家を目指したのに、開発経済の授業が何年も開講されないという想定外の事態から、結局全く別の進路となり研究者の道に入ることになりました。

求職活動では、このトピックに関連する論文を書いていた人が論文を評価してくれ、彼女の所属するノースウェスタン大学のビジネススクールに就職することになりました。ビジネススクールに就職することは考えたこともなく、これも偶然でした。ビジネススクールという環境もあって企業との共同研究をするようになりました。ただ、興味の赴くままに研究の手を広げたこともありテニユア（終身雇用権）取得に失敗し、再度の求職活動になりました。

移籍先の香港科技大では世界大学ランキングを駆け上るアジアの大学のダイナミズムをひしひしと感じながら、私は実証ミクロ経済学という自分の研究道具がビジネスの現場で役に立つ手応えを感じ始めていました。単に面白さから選んだ分野が、偶然にもビジネスや社会で役立つように急速に発展していました。

ちょうどその数年前から Amazon が大学所属の実証ミクロ経済学者をアメリカで集めはじめ、日本で最初のエコノミストとして誘われました。一定の研究業績はあったので大学への再就職は難しくなくリスクは抑えられると考えて、香港科技大を退職し挑戦することにしました。

Amazon ではビジネスの意思決定を直接支える分析をして充実した日々を過ごしました。途中でポジションが上がったところで、ちょうど東大から話がありました。東大の話は教員の話とともに、経済学研究科の中で経済学の社会実装の会社を作る話もありました。

東大着任後は公共政策大学院と経済学研究科で教えながら、この会社の設立準備チームで作業し、2020 年 8 月に東大の子会社として東京大学エコノミックコンサルティング株式会社が設立されました。それ以来スプリットアポイントメントでこの会社の取締役を兼職しています。これも想定していなかった進路です。

経済学の社会実装といわれても想像がつかないと思う方が多いと思いますが、関心があれば駒場の方は S1S2 ターム金曜 2 限の現代経済理論の授業を履

修してみてください。

公共政策大学院も知名度は低いかもしれませんが。専門職大学院として公共政策に関心のある学生を幅広く受け入れており、学生の半数以上が外国人で教授会も英語、私も担当授業はすべて英語という東大の中では異色の大学院です。是非将来の進学先候補に加えてみてください。就職実績は抜群ですし、博士課程もあり、学生も教員もユニークな人ばかりです。

改めて振り返ると、大学入学時に思い描いた進路から何度も進路が変わり、数年おきに職を変えることになるとは思いませんでした。

最初に「自分のキャリアにあまり後悔がない」と書いたのですが、少し口を濁した言い方なのは、開発金融のプロフェッショナルになっていたらどんな仕事をしていたかなと時々思うからです。昔の同僚たちが JICA や開発の仕事を長年続ける姿を見ると、自分の掲げる理想からブレずに同じ道を進み続けられることに心から敬意を抱きます。強い理想と意思を持ち、進路を変えずに進めることが本当は一番良いのだろうと、自分にはできませんでしたが、思います。